

『論語』「子罕」人名考（下）

陳 仲 奇

はじめに

1. 従来の諸説の検証
 - (1) 主流派の連読説
 - (2) 史繩祖の別句説 A
 - (3) 徂徠の別句説 B
 - (4) 「利」「命」「仁」三者の関係
2. 『論語』の篇名について
 - (1) 『論語』の成立年代および版本の流伝経緯
 - (2) 『論語』各篇名の命名法
3. 春秋時代の命名慣習について（以上、上、第2号）
4. 春秋時代の三人の「子罕」
 - (1) 鄭国の「子罕」
 - (2) 宋国の「子罕」
 - (3) 『孔子家語』の「子罕」
5. 『孔子家語』の文献信憑性についての考察
 - (1) 偽作の動機
 - (2) 偽作の手法
 - (3) 偽作の程度
6. 司馬遷の非人名説の原因についての考察
 - (1) 『史記・仲尼弟子列伝』の資料源について
 - (2) 『論語』各篇の成立と「子罕」篇の性質について

おわりに

4. 春秋時代の三人の「子罕」

それでは、春秋時代に「子罕」なる人物が存在していたか、それを探ってみることにしよう。この作業を始める前に、二つの原則を立てる必要がある。『論語』は孔子と弟子たちの言行録であるため、『論語』に収録された「子罕」が孔子ではなく、他の人物を指すのであれば、その人物は孔子以前の人であるか、もしくは孔子の弟子であるかのいずれかの条件に合わなければならない。孔子以前の人物であれば、孔子と弟子たちの議論の対象となった可能性が高く、孔子以後の人物であれば、弟子の場合はその言行を『論語』に収

録されることもあり得るが、それ以外は孔子と無関係であるため、収録される可能性はないと考えられるからである。この二つの原則を持って先秦文献を検討してみると、少なくとも三人の「子罕」が浮かんでくる。以下、この三人の「子罕」について詳しく検討してみよう。

(1) 鄭国の「子罕」

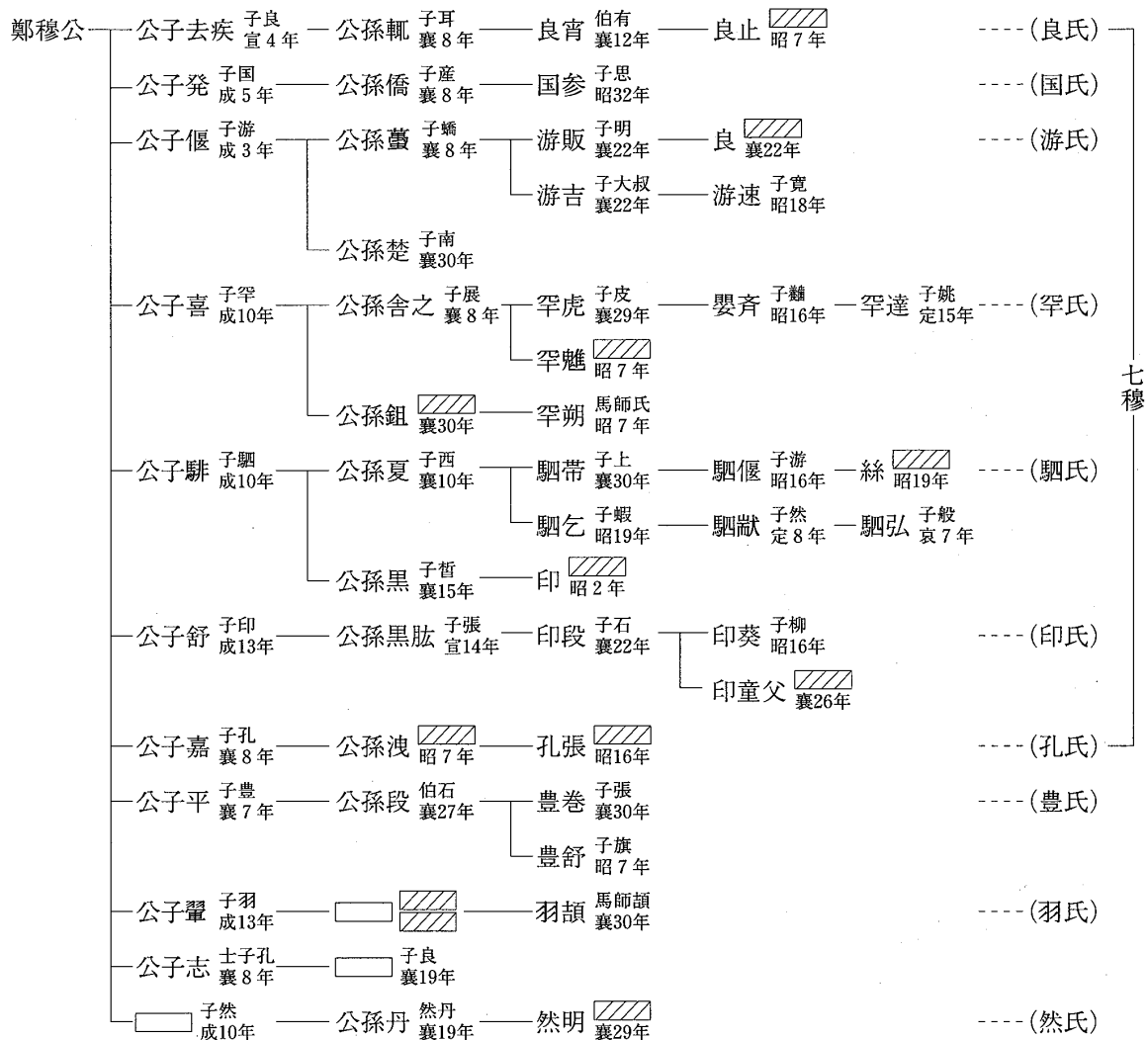
春秋時代の鄭国は、もともと周厲王の「少子」、周宣王同母弟の友の封国であり、周の皇族と同姓の姬姓公国である。『春秋』は鄭武公から始め、五伝にして鄭穆公に至っている。この鄭穆公には十三人もの息子がいた。そのうち太子夷は後に鄭の靈公として即位したが、一年後に殺されて、公子堅が鄭の襄公として即位した。他の十一人の息子は皆大夫に命じられたが、公子嘉（字子孔）、公子志（字士子孔）、子然は早く死去し、子羽は卿になれなかった。残りの七人の息子は、それぞれ駟氏、罕氏、豊氏、游氏、印氏、国氏、良氏の開祖となり、鄭国の「七穆」と呼ばれている⁴³⁾。(附表Ⅳ参照) 罕氏の開祖は鄭穆公の息子の公子喜であり、その字は「子罕」であった。

公子喜子罕という人物は、成公十年（前581年）、初めて政治の表舞台に登場し、鄭国の最も重要な政治家として重任を担っていた。当時の鄭国は晋と楚と齊の三大国の狭間で、左右に迎合しながら懸命に国の安全を保とうとしていた。小国の鄭は大国の晋や楚に翻弄され、外圧と内乱が絶えず、一刻の安定も得られなかったようである。このような惨憺たる国情が、場合によっては、政治家の個人的才知を発揮させる歴史的なチャンスともなる。後の鄭の子産（子罕の甥）は、その好例と言える。しかし、公子喜子罕自身は、子産に先立って国の動乱を救うために乗り出したが、時勢に恵まれず、とうとう時代の流れに呑み込まれてしまった。以下、この公子喜子罕の経歴を少し詳しく見てみよう。

前580年の秋、鄭の成公が晋に出かけた時、晋の人は鄭伯が晋を裏切って楚に加担したことを責め、銅鞮に閉じ込めるという事件が起きた。これをきっかけに晋鄭両国の間は陰悪となり、楚衛陳齊等の国々も動き出した。そこで、鄭の公孫申が一つの策略を考え出し、新しい国君を立てるふりをして、晋に鄭伯の幽閉を断念させようとした。しかし、鄭の公子班はこれを真に受けて、慌てて成公の庶兄にあたる公子綏を国君に立てた。この行動は鄭国の動乱をさらに深刻化させ、鄭の人は公子綏を殺して、成公の太子の髡頑を立てることにした。ここに至って晋の欒武子は鄭伯をこれ以上拘束するのはもはや無意味だと見切りをつけ、晋の景公が病気になった時、諸侯を集めて鄭国を伐った。その時外交の表舞台に立ったのが公子喜子罕であり、彼が襄公（成公の父）の廟の鐘を賂として晋に贈って講和を求めた結果、両国は脩澤で盟を立て、子駟を人質にして和議が成立した。辛巳の日（五月十二日）、鄭伯はようやく帰ることができた（『左傳・成公十年』）。

その後、鄭は晋楚の覇権の争いに巻き込まれ、子罕もその戦いの最前線で活躍した。前577年に許を伐とうとして敗れた（『左傳・成公十四年』）が、翌年には楚を侵して新石を取った（左傳・成公十五年）。更に前575年、晋に叛いて宋を侵し、勝利を得た（『左傳・成

附表Ⅳ 鄭国の七穆の世系



- 凡例 1. 「公子去疾^{子良}_{宣4年}」の「公子去疾」は名を示す。「子良」は字を示す。「宣4年」は文献の初見を示す。この場合は、『春秋左氏伝』の経或いは伝の「宣公4年」という意味である。
2. 名が不明の場合は、 で表す。字が不明の場合は、 で表す。文献の初見が不明の場合は、 で表す。

出典 この表は①陳厚耀の『春秋世族譜』（四庫全書本）②孫曜編『春秋時代之世族』（中華書局 民国二十年四月）によって、筆者が作成したものである。

公十六年』）が、この事件は鄭にとって極めて深刻な事態を招いた。晋が鄭の二度目の裏切り行為を許すわけにはいかない、晋侯が直ちに鄭の討伐に乗り出すと、楚子が鄭に援軍を差し向け、やがてこれは晋楚両大国の大戦「鄢陵の戦」に発展することとなった。この戦いで、子罕も奮戦して宋、齊、衛の軍を破ったが、この勝利も大勢には影響がなく、晋宋諸侯連合軍に楚軍が大敗したことで「鄢陵の戦」は幕を下ろした（『左傳・成公十六年』）。

前571年の秋、鄭伯論が没し、子罕が国政に当ることとなる（『左傳・襄公二年』）が、

5年後の前566年に大きな事件が勃発した。詳しい経緯は省いて簡略に記すと、鄭の僖公は子罕、子豐、子駟ら要人たちを粗略に扱うことがあったため、これに怒った子駟が僖公を殺害してしまったのである(左傳・襄公七年)。この事件は子駟のクーデータとなった。翌年、鄭の群公子は僖公を殺した子駟を討とうとしたが、しかし、子駟はその先手を打ち、夏四月庚辰の日(十二日)、子狐、子熙、子侯、子丁の四公子を殺し、子狐の子の孫擊と孫惡は衛に亡命した。

同じ『左傳・襄公七年』の記事に、子豐が僖公の無礼を怒り、これを廃立しようと謀った時、子罕がこれを止めた、とあるところから、子罕は子駟のクーデータに反対する立場にあったと思われる。恐らく彼も「群公子」の謀議に加わった一人だったのかもしれない。子駟の乱の時、子罕が事件に巻き込まれたかどうかは不明だが、頻繁に書かれてきた子罕のことが、この年を境に『左伝』から姿を消している。

附表Ⅳに挙げた鄭の七穆の世系表を見れば分る通り、子罕の孫の子皮に至って、子罕の字の「罕」が氏となった。これが「罕氏」の始まりである。『広韻』二十三旱の「罕」の注には、「左伝鄭有罕氏、出自穆公、以王父字為氏」と記している。「王父」は「祖父」のことであり、鄭の七穆の世系表では、例えば良氏は「子良」から、国氏は「子国」から、游氏は「子游」から、「罕氏」は「子罕」から、駟氏は「子駟」から、印氏は「子印」から、孔氏は「子孔」から、豐氏は「子豐」から、羽氏は「子羽」から、というように祖父の字が氏となっている。この伝統は鄭だけではなく、宋、陳、蔡、齊等の国々にも見られる⁴⁴⁾。

子罕の子孫の「罕氏」は、その後、長く鄭の国政を牛耳っていた。前544年、子罕の子公孫舍之(子展)が死去し、孫の子皮(罕虎)がその跡を継いだ。当時の鄭国は飢饉に遭ったため、子皮は父の遺命と称して、穀物を各家ごとに一鐘ずつ与えた。晋の叔向はこれを聞いて、「鄭の罕氏と宋の樂氏は、最後まで続く家であろう。両氏とも長く国政を司るであろう」と賛辞を捧げている(『左伝・襄公二十九年』)。その時、孔子は七歳であった。

罕氏はその後もずっと栄えた。清の陳厚耀の『春秋世族譜』によれば⁴⁵⁾、罕虎は襄公二十九年(前544)の初見から15年後の昭公十九年(前529年)に没している。罕魋は「馬師氏」とも呼ばれ、昭公七年(前535年)罕朔に殺され、罕朔は同年晋に亡命した。その時孔子は既に十六歳であった。罕虎の孫の罕達は定公十五年(前495年)の記事が初見であり、哀公十三年(前482年)軍隊を率いて、宋を伐ったと『左伝』に記されている⁴⁶⁾。孔子が六十九歳の時のことである。また、昭公七年(前535年)、罕朔に殺されたもう一人の罕臣と、哀公二年(前493年)に見られる罕駟については、陳厚耀の『春秋世族譜』には載っていないが、彼らも公子喜子罕の子孫と見て誤りがないであろう。

ここまで、子罕の一族を詳しく追跡してきた理由は二つある。一つは「公子喜子罕」が孔子以前の時代の人であり、しかも、春秋時代のうねりの最中に活躍した人物であったことである。孔子が鄭の子産を評価したように、公子喜子罕のことを話題にしたことも想像に難くない。もう一つの理由は、孔子の弟子には「罕父黑」という人物がいた点にある(附

表Ⅲを参照)。『史記』には「罕父黒字子索」とあるだけで、『孔子家語』にも「罕父黒字索」としか書いていない⁴⁷⁾ ため、詳しいことは分らないが、罕氏一族が「公子喜子罕」に由来していることを考え合せると、事情は変わってくる。この「罕父黒」がもし「公子喜子罕」の子孫だと仮定できれば、彼は前述の罕達と年代的にそれほど大きな差がないはずである。孔子のもっとも若い弟子に五十三歳年下の公孫龍（字子石）がいるが、罕父黒が同年代であれば前500年前後の生まれとなるから、罕達と同世代か、少なくともその前後の世代と考えられる。もしそうであるならば、弟子の祖先が有名な人物であるため、孔子も時々話の中で言及することがあり、それが『論語』の一節として残ったことも十分に考えられるのではなかろうか。

（2）宋国の「子罕」

宋国の「子罕」は樂喜のことである。宋の樂氏の世系については、『禮記・檀弓下』の注に『世本』を引用して「戴公生樂甫術術生石甫願繹繹生夷甫傾傾生東郷克克生西郷士曹曹生子罕喜」と記している。分りやすくすると、戴公→樂甫術→石甫願繹→夷甫傾→東郷克→西郷士曹→子罕喜と世系が伝わったということである。

王引之『春秋名字解詁』によると、古人が名と字を併称する時は、字を先、名を後に置くのが一般的である⁴⁸⁾。たとえば「樂甫術」は「戴術、字樂甫」になる⁴⁹⁾。また、前述の「王父の字を氏となす」習慣から、樂を氏にしたのは「夷甫傾」の時からである。従って、この世系を書き改めると、次のようになる。

戴公→戴術（字樂甫）→戴願繹（字石甫）→樂傾（字夷甫）→樂克（字東郷）→樂士曹（字西郷）→樂喜（字子罕）⁵⁰⁾

樂喜子罕は樂甫術の五代目の孫にあたり、「司城子罕」とも呼ばれた。「司城」というのは官職名であり、土木関係の役人である。もともとは「司空」といったが、宋の武公の諱を避けるため、「司城」となった。

樂喜子罕の活動した時代は鄭の公子喜子罕より遅かった。彼が初めて『左伝』に登場するのは、公子喜子罕が舞台から退く二年前、即ち前567年の次の一文からである。

宋の華弱、樂轡と少くして相狎れ、長じて相優れ、また相謗る。子蕩怒り、弓を以て華弱を朝に梏す。平公之を見て曰く、司武にして朝に梏せらる、以て勝へ難し、と。遂に之を逐ふ。夏、宋の華弱來奔す。司城子罕曰く、罪を同じくして罰を異にするは、刑に非ざるなり。戮を朝に専らにす。罪孰れか焉より大ならん、と。亦子蕩を逐ふ。子蕩、子罕の門を射って曰く、幾日にして我に従はざらん、と。子罕之を善みすると初の如し。

『左傳・襄公六年』⁵¹⁾

ここで樂喜が平公に対して異議を訴えたのは原則や理念に基づいている。その原則というのは、法の公平と権力の集中である。しかし、子蕩の武力の威嚇にはすぐおれた。これは腰抜けと批判されても仕方がないが、当時の小国政治家としては、あえてこのような妥協をする柔軟性も必要だったのかもしれない。前556年の次の事例がそのことをよく物語っ

ている。

宋の皇國父、大宰たり。平公の為に臺を築き、農収を妨ぐ。子罕、農功の畢はるを俟たんと請ふ。公許さず。築く者謳ひて曰く、澤門の哲、實に我が役を興し、邑中の黔、實に我が心を慰む、と。子罕之を聞き、親ら^{ほく}扑を執り、以て築く者を行きて、其の勉めざる者を扶^{むち}うちて曰く、吾が儕小人、皆闔廬有り、以て燥濕寒暑を辟く、今、君は一臺をなりて速かに成さずんば、何を以て役となさん。謳ふ者乃ち止む。或ひとその故を問ふ。子罕曰く、宋國は區區たり、而るに詛有り祝有るは、禍の本なり、と。

『左傳・襄公十七年』

樂喜は最初平公に工事の延期を要請したが、容れられなかった。そこで彼は平公と民夫の対立の激化を防ぐために自ら工事現場に行き、民夫の苦痛を慰めながら、調停役に徹した。その理由は「宋國は區區」たる国であり、晋楚等の大国が虎視眈々と窺っており、唯でさえ危ない状況下にある、もし内部の分裂が生じ、上下が離反すれば、「禍の本なり」と深刻に受け止めたからである。

この種の小国の現実から生まれた危機感は、樂喜の全人生の基本指針となった。以下の三つの事例は彼の人柄や政治的姿勢、人生観といったものを分析する上でたいへん重要な資料だと筆者は考えている。

①前558年。「宋人、或玉を得るあり、諸を子罕に獻す。子罕受けず。玉を獻ずる者曰く、以て玉人に示せしに、玉人以て寶と為せり。故に敢へて之を獻ず、と。子罕曰く、我は貪らざるを以て寶と為し、爾は玉を以て寶と為す。若し以て我に與へば、皆寶を喪ふなり。人々其の寶を有するに若かず、と。稽首して告げて曰く、小人璧を懷かば、以て郷を越ゆ可からず。此を納れて以て死を請ふなり、と。子罕、諸を其の里に寘き、玉人をして之が為に之を攻めしめ、富みて後に其の所に復らしむ。」

『左傳・襄公十五年』

②前546年。「宋の左師、賞を請ひて曰く、死を免るるの邑を請ふ、と。公之に邑六十を與う。以て子罕に示す。子罕曰く、凡そ諸侯の小國は、晋・楚、兵を以て之を威す所にして、畏れて後に上下慈和し、慈和して後に能く其の國家を安靖して、以て大國に事ふ。存する所以なり。威すこと無くんば驕る。驕れば則ち亂生ず。亂生ずれば必ず滅ぶ。亡ぶる所以なり。天、五材を生じ、民並びに之を用ゐる。一を廢するも不可なり。誰か能く兵を去らん。兵の設けらるるや久し。不軌を威して文德に昭にする所以なり。聖人は以て興り、亂人は以て廢る。廢興存亡、昏明の術、皆兵に之れ由る。而るに子之を去らんことを求むるは、亦誣ひざるか。誣道を以て諸侯を蔽はば、罪焉より大なる莫し。縦ひ大討無きも、又賞を求むるは、厭く無きの甚だしきなり、と。削りて之を投ず。左師、邑を辭す。向氏、司城を攻めんと欲す。左師曰く、我將に亡びんとす。夫子我を存せり。德焉より大なるは莫し。又攻む可けんや、と。君子曰く、彼己の子は、邦の司直なりとは、樂喜を之れ謂ふか、何を

以て我を恤ましめん。我其れを収むとは、向戌を之れ謂ふか、と。』

『左傳・襄公二十七年』

- ③前544年。「鄭の子展、卒す。子皮位に即く。是に於て、鄭饑ゑて、未だ麥に及ばず、民病む。子皮、子展の命を以て、國人に粟、戸ごとに一鍾を餼る。是を以て鄭國の民を得たり。故に罕氏常に國政を掌りて、以て上卿と為る。宋の司城子罕、之を聞きて曰く、善に鄰りするは、民の望みなり、と。宋亦饑う、平公に請ひ、公粟を出だして以て貸し、大夫をして皆貸さしむ。司城氏は貸して書せず。大夫の無き者の為に貸す。宋に飢人無し。叔向、之を聞きて曰く、鄭の罕、宋の樂は、其れ後に亡ぶる者なり。二者其れ皆國を得んか。民の歸なり、施して徳とせざるは、樂氏加れり。其れ宋と升降せんか、と。』

『左傳・襄公二十九年』

①の玉を献する話は、樂喜子罕の利に対する淡泊さを物語っている。②の「兵」即ち武力に対する現実的な態度と春秋の動乱の時期における小国の安全意識とは、分を守る精神の表われと見ることができ、③の飢民を救済する心は「仁」の行いと言えよう。これらのことから、筆者は樂喜子罕が「利」と「命」と「仁」とを語る資質を有する人物だと考えている。事実、孔子も樂喜子罕の行為に賛辞を捧げたことがある。孔子と樂喜は時代も近いし、接点を持っていたことが次の資料からも証明できる。

陽門の介夫死す。司城子罕入りて之を哭すること哀し。晉人の宋を覘ふ者、反りて晉侯に報じて曰く、陽門の介夫死して、子罕之を哭すること哀しく、民説ぶ。殆ど伐つ可からざるなり、と。孔子之を聞きて曰く、善いかな國を覘ふものや。詩に云ふ、凡そ民の喪有れば、扶服して之を救ふと。晋のみに微ずと雖も、天下其れ孰か能く之に當らんや、と。

『禮記・檀弓下』⁵²⁾

『論語』の中では管仲（「八佾第三」、「憲問第十四」）、子産（「公冶長第五」、「憲問第十四」）のような政治家にも言及しているところからすると、孔子と弟子たちが当時の政治家を話題にすることはしばしばあったと思われるから、司城子罕のことも話題に上った可能性は十分に考えられる。『論語』の「子罕言利與命與仁」は、まさにその一部が記録されて残ったものだという推論も成り立つのではなかろうか。

ところで、「宋の子罕」にはここまで論じた子罕のほかにもう一人の「宋の子罕」がいる。それは先ず、次の『韓非子・外儲說右下一』中の一節に登場する。

賞罰ともにするときは、則ち禁令行はれず。何を以て之を明かにする。造父・於期を以てす。子罕、出殯と為り、田恒、圃池と為る。故に宋君・簡公弑せらる⁵³⁾。

ここは、君主が臣下をコントロールするには「賞罰」の二つの権力を自らの手に握るべきだと力説している箇所であるが、臣下に分権した場合の悪しき例として子罕が挙げられているのである。因みに、「出殯」というのは、馬に乗っている時、急に道端から一頭

いのしし
の猪が現れると、伝説の御者造父を持ってしてもコントロールできなくなるということ
を言っている。これは、具体的には何を意味しているのか。同書の後に続く話は以下の通
りである。

司城子罕宋君に謂つて曰く、慶賞賜與は民の喜ぶ所なり、君自ら之を行へ。殺戮誅罰
は民の惡む所なり、臣請ふ之に當らむ、と。宋君曰く、諾と。是に於て威令を出し大
臣を誅するには、君曰く、子罕に問へ、と。是に於て大臣之を畏れ、細民之に歸す。
處るところ期年にして、子罕宋君を殺して政を奪う。故に子罕は出殯と為りて、以て
其の君國を奪ふものなり。

これによると、子罕の「出殯」は刑罰の威力を持って民を脅かすという意味であること
がわかる。それはともかく、この子罕「篡宋」の話が真実であるのか否か、少々気になる。
子罕が宋君を殺し、國を奪ったことは司馬遷の『史記・宋世家』には記録されていないが、
『韓非子』の「二柄」、「内儲説」、「説疑」にも同じことが書かれているだけでなく、『韓詩
外傳七』、『史記・李斯傳』の「李斯上二世書」、『淮南子・道應訓』にも同様の話が記録さ
れている。そうすると、この話は戦国時代以来広く知れ渡っており、しばしば話題となっ
ていたと思われる。例えば、『説苑・君道篇』には「司城子罕、宋に相し、其の君を逐ひ
にして其の政を專う」とあり、『韓非子』と『説苑』とでは宋君を殺したか、追い払った
かの違いがあるものの、子罕の「篡宋」という事実は動かないようである。

また、『史記卷八十三・魯仲連鄒陽列傳第二十三』にも次のような記述がある。

鄒陽……乃ち獄中より上書して曰く……昔者、魯は季孫の説を聽きて孔子を逐ひ、宋
は子罕の計を信じて墨翟を囚へぬ。夫れ孔・墨の辯を以てするも、自ら讒諛を免る
こと能はずして、二國以て危かりき。何となれば則ち衆口は金を鑠し、積毀は骨を銷
せばなり⁵⁴⁾。

これによると、墨子を牢屋に入れたのも子罕の仕業である。この子罕が前述の樂喜と同
一の人物であれば、その人格はあまりにも違いすぎ、豹変ぶりも甚だしいと言わねばなら
ない。しかし、この『史記』の記述からは、逆に同一人物であることが疑わしくなる。な
ぜならば、前述の樂喜が鄭の子皮に學んで宋の飢民を救済したのは前544年、孔子僅か7
歳の時のことであり、孔子より年下のはずの墨子が子罕の讒言の被害者になることは不可
能なのである。

更に、『呂氏春秋・召類篇』の高誘注には「春秋の子罕、昭公を殺す」とあり、子罕が
殺したのは宋の「昭公」であることが分る。しかし、宋には前後二人の昭公がいた。前の
昭公は前619～611年の在位。樂喜よりも年代的に早かった。後の昭公は前453～406年在位
で、すでに戦国時代になっていた。墨子の年代とは合うが宋の樂喜とは合わない。それ
では、『韓非子』の中の子罕は誰なのか、それはもう一人の「子罕」と考えるしかない。清
の孫詒讓はこの「子罕」を皇喜のことだと断定しているが（皇喜が昭公を殺したのは周威
烈王の二十二年、即ち前380年のことだとも言っている）⁵⁵⁾、その根拠となっているのは

『韓非子・内儲説下』の次の記述である。

戴驩、宋の太宰にたり、皇喜君に重んぜらる、二人事を争うて相害む、皇喜遂に宋君を殺して、其の政を奪ふ。

陳厚耀の『春秋世族譜』によれば、皇氏も戴公の子孫である（「戴公之後、為華氏、為樂氏、為老氏、為皇氏。」）。つまり、戴公の後には太子の武公が即位して本家を継いだ、それ以外の庶子は分家として、華氏、樂氏、老氏、皇氏の四つの氏に分かれた。皇氏の開祖は戴公の息子の「皇父充石」（「皇父」は字）である。前述「王父の字を氏となす」習慣によって、孫の代で氏となり、皇国父という人物が『左伝』襄公十七年に登場している。皇喜はその後人であろう⁵⁶⁾。なお、孫詒讓は、春秋の命名習慣では名を「喜」と呼ぶ人は「罕」を字にした例が多いとも述べているが、それは前述の公子喜と樂喜の例からも見てとれる。

ここまで述べてきた通り、『韓非子』及びその他の文人たちの作品にしきりに登場した「司城子罕」は春秋時代の樂喜とは違う人物である。孫詒讓の言う通り戦国時代の皇喜のことであれば、その活動年代は孔子が死去して百年近くもたった後であり、孔子の弟子でもない。筆者が挙げた原則から除外されるべき人物である以上、『論語』の「子罕」とは無関係である。ここまで、皇喜子罕について少し長々と述べすぎたきらいがあるかもしれないが、これは樂喜との混同を避けるためであり、ここで両者を区別しておかないと、先に樂喜を『論語』の「子罕」の一人と推定したことも甚だ疑わしくなってしまうからである。それでは、第三の「子罕」を検討してみよう。

（3）『孔子家語』の「子罕」

『孔子家語』卷第十「曲禮子夏問」第四十二条は次のようになっている⁵⁷⁾。

子罕、孔子に問うて曰く、始め死の重を設けるや、なんすれぞ、と。孔子曰く、主道を重んじるなり。殷主は重を焉に綴し、周人は重を焉に徹する、と。請わくは喪の朝を問う、と。子曰く、喪の朝や、死者の孝心に順えばなり。故に祖考に至り、廟にして、後に行う。殷は朝にして、後に祖に殯し、周は朝にして、遂に葬る、と⁵⁸⁾

ここで、「子罕」は孔子に喪禮の「重」の設け方と喪の「朝」のことを聞き、孔子が殷禮と周禮のそれぞれの違いを説明している。具体的な話の内容は不明の点もあるが、「子罕」という人物が孔子の弟子である可能性は非常に高い。もし、この「子罕」が孔子の弟子であることが確認できれば、『論語』の「子罕」が人名であることはほぼ確実と言えるが、残念ながら『孔子家語』が偽作と見なされているため、軽々しく断定することはできない。再び本旨から逸れることになるが、結論を出す前に、まず『孔子家語』の文献的信憑性について検討しておきたい。

5. 『孔子家語』の文献的信憑性についての考察

今本の『孔子家語』という書物は、十卷四十四篇を収録し、撰者不明、魏王肅注と題し

て王肅の序と孔安国の後序が付されている。二つの序にその成立過程や来歴が書かれているが、古くから真偽が問題になっている書である。『漢書・藝文志』の「儒家類」には、『家語』二十七卷と著録されているが、すでに亡失したため、顔師古は「非今所有『家語』也」と注を加えている⁵⁹⁾。三国時代の馬昭も「家語王肅所増加、非鄭(玄)所見」と言っている⁶⁰⁾。その内容には『荀子』『大戴禮記』『論語』『左伝』『説苑』等の古代の文献との重複が大量に見られるため、南宋の王柏⁶¹⁾と清の姚際恒⁶²⁾は王肅の偽作ではないかと指摘している。これは、王肅が鄭玄の説に対抗するため、孔子に関する古代の文献を集めて整理したものであるとして、清の学者たちは異口同音に王肅の偽作だと主張し、何孟春にいたっては孔安国の序も王肅の偽作だと言っている⁶³⁾。

また、『四庫全書』の『孔子家語提要』は、『孔子家語』が王肅の偽作であることは疑う余地がないとしながらも、「特其流伝已久、且逸文軼事、往々多見於其中、故自唐以来、知其偽而不能廢也⁶⁴⁾。」と述べている。即ち、『家語』は偽作ではあるが、流伝の歴史が長く、多くの文献に引用されて、無視できない存在となっているため、唐代以来、この本が偽作であることを知りながら廃棄することができない、というのである。言い換えれば、四庫の館臣たちも、この『家語』の史料としての価値を認めていたことになる。

経学の立場から見れば、『孔子家語』が王肅の偽作と断定された以上、その価値は当然否定される。経学家にとって、聖典の偽作は許されない、孔子と儒学との尊厳と純粹さを何よりも重要視しなければならないからである。しかし、史料学の立場から見れば、偽作には偽作なりの価値がある。作者の真偽と作品の価値は別の問題である⁶⁵⁾。

我々の関心事は『孔子家語』の作者の真偽ではなく、この書物に記録されている「子罕問」の文献上の信憑性である。そのため、まず王肅がどうして、どのように、どこまでこの書物に手をつけたのかを考察する必要がある。

(1) 偽作の動機

王肅(195~256)の経説は、魏晉の間、絶大な影響力を持っていた。当時は「王学」と呼ばれ、学官に列し、博士を設けたほどである。王肅はかつて群経を注し、『尚書』、『詩経』、『論語』、『三禮』、『左伝』等、ほとんどの儒家經典に手を加えた。彼は鄭玄と同じく経学の通儒であり、漢以来の経の古文、今文の門戸を重視しない立場に立ったが、鄭玄の説を好まず、わざわざ鄭玄と違う解釈を立てるのが好きであった。経学史における王鄭の争いは一大公案であった。『三国志』王肅本伝には、王鄭の確執を次のように記している。

初め、肅、賈・馬の学を善くし、而して鄭氏を好まず。同異を采会して、尚書、詩、論語、三禮、左氏の解を為り。及び父の朗の作るところの易伝を撰定し、皆、学官に列せらる。其の論駁するところの朝廷の典制、郊祀、宗廟、喪紀、輕重、凡て百余篇なり。時に樂安の孫叔然、学を鄭玄の門に受け、人、東州の大儒と称す。徴せられて秘書監となるも、就かず。肅、聖証論を集め、以て譏りて玄を短とす。叔然、駁して之に积し、及び周易、春秋例、毛詩、禮記、春秋三伝、国語、爾雅の諸注を作り。又、

書十余篇に注す。魏初の徴士燉煌の周生烈、明帝の時の大司農弘農の董遇らもまた経伝に歴注してより、頗る世に伝へらる。

これによると、鄭玄の学説を攻撃するため、王肅が『聖證論』を著したことがあるという。『孔子家語』の性質から見れば、これは『聖證論』を書くための準備段階に集めた資料集であり、そもそも鄭玄とのライバル意識から作られたものではないかと考えられるのである。

（2）偽作の手法

王肅の著述の手法は、大体、鄭玄と違う説を取るところにある。鄭玄が古文説を取れば、王肅は今文の説を使い、鄭玄が今文説を使えば、彼はまた古文説に基づいて鄭玄の説を批判する。言い換えれば、漢の今文説と古文説がある程度後世に伝わったのは、そのおかげと言うこともできよう。

王肅と鄭玄はともに賈逵、馬融の古文経の学恩を受けていた。その学問の体系は基本的に同じであり、王肅は鄭玄の「別裁」（学問的選別）に不満があっただけである。そのため、王鄭の争いは本質的には経学の範囲内における正統性の争いといえることができる。この点は劉歆が王莽新朝の政権を正統化するため、古史伝説を偽作したのと本質的に違うのである。漢学の学風には師説を墨守するという特徴があった。自説の正当性を主張する場合、架空の説を立てるのではなく、有力な師説を根拠として示すのが勝負のルールである。王肅も鄭玄も経の今文説と古文説を「融会貫通」するところと同じであるが、基本的に漢学の「述而不作」の原則は守っている。王肅が、鄭玄を攻撃するためにわざわざ「朝廷典制、郊祀、宗廟、喪紀、輕重」等に関する古代文献を蒐集して、『聖證論』を作らなければならなかった理由もこれで説明できる。

『孔子家語』の偽作の手法も同じである。王肅は元来の二十七篇の『孔子家語』を改ざんしたのではなく、ただ自分の集めた、自説に都合のいい資料、つまり鄭玄の説と違う資料をその中にいれて、『孔子家語』の権威性を利用しただけである。前述の馬昭の「家語王肅所増加」もその証明になる。この辺の事情については、錢馥の次の説明が大きな説得力を持っていると思う。

王肅がこの本を世に出した時は、その二十七卷の古『家語』はつぶさに伝わっていたのである。もし、まったく違うのであれば、王肅の本は決して世に流布することはなかったであろう。流布したということは、二十七卷の古「家語」は決してなくなることはない。ただ十七篇を増やしただけで、二十七篇がその中に入り、これが世に流布し、古本の「家語」はなくなったというだけのことである。古文『尚書』の例を見れば、この仮説は間違っていないであろう。まして、馬昭の証拠とするに足る言葉があるのだからなおさらだ⁶⁶⁾。

この点については、朱熹も同じ意見である。

朱熹が言う。『家語』はただ王肅が編集した古録雜記である。その本には確かに多く

の欠点があるが、しかし、王肅の作ではない。また言う。『家語』の記述は不純なものではあるが、当時の書であることは間違いない⁶⁷⁾。

(3) 偽作の程度

以上述べてきたことに誤りがなければ、『孔子家語』の偽作の程度を測ることも可能になる。この点に関しては、以下の武内義雄氏の論が大いに参考になる。

今の家語の中に王肅の増加する部分は大体荀子と一致する部分および禮説に関する部分なるべく、そのいはゆる禮説も後序に小戴記を非難せると、鄭玄が小戴を注して王氏が鄭説に乖反する多きとより推せば、王肅がよれる禮説は小戴記にあらずして大戴禮記なるべし。従つて今の家語の中より、荀子および禮説の文と思しきものを刪去すれば、その余は大体、古家語の文を材料として篇次を改め、私定を加へしものなるべし。孫志祖諸人は、独り荀子および禮説のみならず、説苑・史記等の諸書に符合する部分も王肅の撰ならんとするも、これらの部分は、説苑等がかへつて古家語の文を襲ふものなるべく、家語の文は、大略説苑等と合して、小異同あるところは王肅が古家語を点定せるか、あるひは説苑等の作者が損益せるかなるべく、これら類似の文を比較して考究すれば、古家語の一部は想見せらるべきに似たり。またその禮説に関する部分は大戴禮記によれるもの多く、これによりて今本大戴禮の錯誤を訂正すべきものも少なからず。王引之の経義述聞の中、家語によりて大戴を正せるゆゑに肯綮に当るもの多きは、これに因るなり。また今本大戴禮は残欠の余にして、王肅所見本はさらに完備せるものなるべく、家語によりて大戴の欠逸を補ふべきものあるべし⁶⁸⁾。

長い引用となったが、ここには『孔子家語』の性質が的確に示されていると思う。王肅の偽作は古『家語』の權威を借りるところにあった。二十七篇の古『家語』は王肅のそれに含まれているはずであり、増加した部分も大体「古録雜記」の類である。もちろん、『家語』を研究するにはもっと緻密な研究が必要であろう。例えば、どの部分がどの文献から取られているか、どの部分が古本の『家語』のままになっているのか等、より深く考察すべき点は多いが、本旨と離れるので割愛する。当面は、今本『孔子家語』に古本『孔子家語』の二十七卷が入っていること、王肅が編入したのは「古録雜記」であることが明らかであれば、前述の『孔子家語』の「子罕問」の問題を解決するには十分だからである。

筆者はこの「子罕問」の一節が古本の二十七卷の『孔子家語』のものと考えているのだが、以下でその理由を述べることにしたい。

先ず指摘しておきたいことは、この一節が『家語』以外のどの伝世文献にも見当たらないという点である。このことは、二つの可能性を意味している。一つは、この一節がもともと古本の二十七卷の『孔子家語』にあったという可能性であり、もう一つは王肅の偽作という可能性である。

後者を取れば、王肅が『論語・子罕』篇の「子罕」を人名と解し、わざわざ『孔子家語』にも「子罕」という人物を作り出したことになるが、これは偽作の基本原則に反する。偽

作の目的は偽作される対象の価値にある。言い換えれば、価値のないものは偽作の対象にはならないはずである。王肅にとって価値あるものは孔子の論述であり、弟子の誰が問題を提起したのかはそれほど重要ではない。たとえ王肅が問題の提起者にも興味があったとしても、より有名な、より広く知られた弟子（例えば、子夏、曾参等）に仮託する方が偽作の信憑性も高まるのだから、わざわざその人物の存在さえ疑われる「子罕」に託す理由がない。偽作者の心理としては、読者がより受け入れやすい人物を選んで、その影響力を利用しようとするはずである。更に、「子罕」という人物に王肅が関心を持っていないことは、『孔子家語』巻9『孔子弟子解』にも「子罕」という弟子が見当たらないことから明らかである。もし、王肅が本当に捏造したとすれば、『孔子弟子解』や『曲禮子夏問』との整合性を図らないはずがない。偽作者の目標は本物に無限に近づけることにある。王肅ほどの人物がこの程度のことわざ破綻を見せるとは思えないのである。

そうすると、考えられる可能性は前者ということになる。つまり、『孔子家語』の「子罕」が孔子の弟子である可能性は非常に高いのである。ただし、ここで断っておきたいのは、以上の立論があくまで現存の文献を前提にしていることである。今後、「子罕問」の一節と重なるような文献が新たに発見されれば、話は別である。改めて、どれがどれを採り入れたかを追求する必要が生じ、その結果、別の可能性を取らざるを得ないかもしれない。しかし、その可能性は小さいと筆者は考えている。現時点という限定付きではあるが、「子罕問」の一節がもともと古本の『家語』に載っていたと考えれば、もっとも合理的な説明が可能であり、『論語・子罕』篇の内容とも整合性を保てるのである。

6. 司馬遷の非人名説の原因についての考察

第一章に述べた通り、『論語・子罕』篇の「子罕」を人名と解釈する学者が現われなかったのは、漢の司馬遷に由来する。それでは、司馬遷はなぜ人名とは見なかったのか。その原因を追究すると、「子罕」が『史記・仲尼弟子列伝』の資料源である『論語』と『弟子問』に載っていないこと、司馬遷が『論語・子罕』篇の性質を理解していなかったことの二点が挙げられる。以下、その原因を詳しく見てみよう。

(1) 『史記・仲尼弟子列伝』の資料源について

司馬遷は『仲尼弟子列伝』の中で、孔子の弟子の資料源を次のように説明している。

太史公曰。學者多稱七十子之徒、譽者或過其實、毀者或損其真、鈞之未睹厥容貌則論言。弟子籍出孔氏古文、近是。余以弟子名姓文字、悉取論語弟子問并次為篇、疑者闕焉。

この「弟子籍云々」以下に関する水澤利忠氏の訓読と現代語訳は以下の通りである⁶⁹⁾。

弟子の籍は孔氏の古文に出づ。是なるに近し。余、弟子の名姓文字を以て、悉く論語の弟子問より取り、并せ次でて篇を為す。疑はしき者は焉を闕く。(弟子籍が、孔家の古文書の中から発見された、それに書かれていることは真実のようだ。私は弟子た

ちの姓名をことごとく『論語』から取り、順序を立てるこの列伝を著わした。疑わしいものはそれをのぞいた。)

これを見ると、水澤氏が「論語弟子問」を『論語』と訳している。つまり、孔子の弟子たちの姓名を司馬遷は『論語』の弟子の質問から取り入れたと解釈しているのである。しかし、これには聊か疑問を感じる。なぜならば、今本の『論語』に載っている弟子の質問から集計して見ても、七十七人の名前がそろわないからである。事実、司馬遷は『史記・仲尼弟子列伝』の中で、「子石より已右の三十五人、顕かに年名有り。及た業を受けしこと書伝に聞見す。其の四十有二人の、年無く、及た書伝に見えざる者は左に紀す」と明言している。言い換えれば、「書伝」から明らかに分るものは三十五人に過ぎず、残り四十二人は不明である。これは、司馬遷の時に、すでに孔子の弟子の全体像がわからなくなったことを物語っている。

それでは、司馬遷は何に基づいて七十七人の「仲尼弟子列伝」を作成したのか。筆者の理解では、『論語』以外に『弟子問』という書物から採ってきたのである。つまり「論語弟子問」という語は『論語』と『弟子問』の二つの書物を指すのであって、『論語』の弟子の質問という意味ではない。『弟子問』というのは、即ち前文の『弟子籍』のことで、「孔氏古文」の中にある書物である⁷⁰⁾。『弟子籍』を『弟子問』に言い換えたのは、司馬遷が行文の変化を求めたためであり、実は両者は同じ書物である。その証左は『孔子家語』にある。『孔子家語』の「七十二弟子解」篇を見ると、その内容は『史記・仲尼弟子列伝』と大変似ている。異なる点は、弟子の数が『史記』の七十七人に対して今本の『孔子家語』では七十二人になっている点だけである⁷¹⁾。しかし、『史記』索引に「孔子家語亦有七十七人、唯文翁孔廟圖作七十二人」という注釈があるところからすると、唐の司馬貞が『史記索引』を作った時の『孔子家語』は七十七人であったが、後の人が孔子廟の七十二人に合わせて削除したと考えることができる。「七十二」という数字も後人が『孔子家語』の流伝過程で加えたものであり、もともとの篇名は『弟子解』であったはずである。そもそも、司馬遷の言う『弟子籍』『弟子問』は『孔子家語』の『弟子解』と同じく、「孔氏古文」から由来し、しかも同類の書物だと推測することができる。

この『弟子籍』即ち『弟子問』或いは『弟子解』といった孔子の弟子の人名録とも言うべき資料に「子罕」という弟子の名前が載っていないことが、司馬遷が『論語・子罕』篇の「子罕」を人名と解さなかったもっとも大きな原因と考えられる。そもそも、司馬遷の時代でさえ、孔子の七十七人の弟子については、すでに不明な者が多い。詳しい事跡が残っているのは、ただの三十五人に過ぎないのである。

(2)『論語』各篇の成立と「子罕」篇の性質について

司馬遷が「仲尼弟子列伝」を編纂する際、もっとも重要な資料源の一つとした『弟子問』に「子罕」の名前がなかったことが、これを人名と解釈しない方向へ誘導したことは上述した通りであるが、司馬遷の速断にはもう一つの原因がある。それは『論語』と孔子の関

係を絶対視し過ぎたことであり、その結果、「子罕」の「子」を孔子と結び付ける方向へ向ってしまったのである。

本稿第2章第1節ですでに触れたように、『論語』は一人の手によって編纂されたものではなく、弟子や孫弟子たちの手を経て、恐らく紀元前479年（孔子卒年）～前400年（子思卒年）の間に成ったものである。司馬遷（西暦145年或いは135年～？）の年代からすでに五百年以上も経っているため、その編集実態がすでに分らなくなっていたのも不思議ではない。前述「仲尼弟子列伝」の「学者多く七十子の徒を称す。誉むる者は或いは其の実に過ぎ、毀る者は或いは其の真を損す。之を鈞しく、未だ厥の容貌を覩ずして、則ち論言す」からもその消息が窺われる。

『論語』各篇の成立実態が分らなければ、「子罕」篇の「子」を孔子のことと認定してもおかしくない。なぜならば、『論語』全書499章は、ほとんど孔子の言葉か孔子と弟子たちの会話を中心に収録された内容である。孔子と関係のない、弟子だけの言葉は非常に少ない。筆者の集計によると、弟子だけの言葉を収録しているのは合計で52章あるが、「子張」篇の25章を除けば、僅か27章しかない。その内訳は附表Vの通りである。

附表V、『論語』の中で、孔子と関係なく、弟子たちの単独の言論を記録している章

篇 名	章次及び弟子の名前
学 而 第 一	第2章：有子。第4章：曾子。第七章：子夏。第9章：曾子。第12章：有子。第13章：有子。
里 仁 第 四	第26章：子游。
公冶長第五	第13章：子貢。第14章：子路。
泰 伯 第 八	第3章：曾子。第4章：曾子。第5章：曾子。第6章：曾子。第7章：曾子。
子 罕 第 九	第1章：子罕。第7章：牢。第11章：顔淵。
先進第十一	第3章：德行～。第18章：柴也愚～。
顔淵第十二	第5章：司馬牛と子夏。第8章：棘子成と子貢。第9章：哀公と有若。第24章。曾子。
季氏第十六	第12章：斉景公、伯夷叔斉についての議論。第14章：夫人の呼び方についての解釈。
微子第十八	第9章：大師摯、叔方らについての記述。第10章：周公謂魯公。第11章：周有八士。
子張第十九	二十五章すべて、子張、子夏、子游、曾子、子貢らの言論。
堯曰第二十	第1章：堯。

その27章の中、「先進」篇の第3、18章、「季氏」篇の第12、14章、「微子」篇の第9、10、11章は発言者が不明、「子罕」篇第7章の「牢曰」と第11章の「顔淵」には孔子の言葉を転述している。残り十七章の中で、有子、曾子、子夏、堯、子游はすべて明らかな人名

であり、「堯」以外は「史記・仲尼弟子列伝」にも載っている、孔子の有名な弟子である。そのなかで「子罕」だけが『論語』に一回しか登場せず、前述の『弟子問』等にも名前が載っていないため、司馬遷が『論語』中の「子」と関連するところはほとんど孔子のことだと考え、「子罕」篇の「子」を「孔子」のことと見なしたとしても無理からぬ点がある。

しかし、武内義雄氏の研究によれば、『論語』各篇の成立は大変複雑である。武内義雄氏は、伊藤仁斎の説を受けて、まず今本『論語』の中、「学而第一」から「郷党第十」までを上論、「先進第十一」から「堯曰第二十」を下論と二つに分けるべきだとし、其の性質は明らかに違うことを指摘した上で、次のように結論している（要約は筆者による）。

- ①為政第二、八佾第三、里仁第四、公冶長第五、雍也第六、述而第七、泰伯第八の七篇、即ち河間七篇本は、曾子、孟子の学派の伝えた孔子語録であり、『論語』の最も古い形態であろう。
- ②先進第十一、顔淵第十二、子路第十三、憲問第十四、衛靈公第十五、子張第十九、堯曰第二十の七篇、即ち齊論七篇本は、子貢を中心とした『論語』で、恐らく齊人の伝えた孔子語録であろう。
- ③学而第一と郷党第十、即ち齊魯二篇本は、その内容および用語から推して子貢派と曾子派とを折中した学派が集成したものであり、孟子が齊に遊んだ後に作られたものであろう。
- ④子罕第九は後人が河間七篇本に附加した部分であり、季氏第十六、陽貨第十七、微子第十八は後人が齊論七篇本に追加した部分。それらの内容は雑駁であり、その年代も部分によって異なるが、最も早くできた部分も戦国末のものであり、遅いものは秦漢の際に追加された可能性もある⁷²⁾。

この結論が必ずしもすべて正しいとは断言できないが、ここに至るまでの考証は大変緻密なものであり、附表Vを見れば、ほぼ正確に状況を捉えていることが分かる。上論では曾子、有子の言論が顕著な地位を占めているのに対し、下論はややバラエティに富み、孔子と無関係な議論も載っているし、「子張」篇の如くすべて子張、子夏、子貢たちの言論ばかりを収録して孔子と関係のある言論は一則も入っていないものもある。

武内義雄氏の考証に大きな誤りがなければ、「子罕」が唐突に『論語』に登場する事情も説明可能になる。「子罕」が『弟子問』『弟子籍』『弟子解』等の人名録にも載っていない無名な弟子であるにもかかわらず、『論語・子罕』篇の冒頭に収録されたのは、恐らく後人の追加によるものである。そしてその後人とは、『論語』の最後の編纂者の可能性もあるが、恐らく「子罕」と何らかの関係をもつ人物、或いはその子孫かも知れない。それは、同じく「子罕」篇の第7章の「牢曰、子云、吾不試、故藝」もかなり怪しいところがあり、明らかに琴牢の記録をそのまま収録したものである（第二章第1節を参照）ことから推測できるのである。

もし以上の推論が当たっているならば、司馬遷の速断にも相応の理由があることは理解で

きる。五百年以上も経って『論語』各篇の成立状況が分からなくなれば、まったく聞いたことがない「子罕」が篇の冒頭が目立つところにあるため、これを孔子だと思ったとしても咎められないであろう。しかし、その結果、二千年近く歴代の『論語』研究者を誤って導いてしまうことになったのである。

司馬遷のこの解釈は、その後一度だけ再考される機会があった。それは何晏が『論語集解』を編纂した時である。この『論語集解』は鄭沖、孫邕、曹羲、荀顗、何晏の五人の共著であったが、隋唐以後「何晏集解」となった⁷³⁾。何晏（?～249）は王肅と同時代の人で、『論語集解』の編集中も時々王肅の意見を聞き、現在の『論語集解』にも王肅の解釈が多く収録されている。しかし、「牢曰、子云、吾不試、故藝」（「子罕第九」）の「牢」は、『孔子家語』によって「琴張」と解釈すべきだと、王肅が自らの大発見と自慢しつつ主張したにもかかわらず⁷⁴⁾、何晏は王肅の説を取りあげず、鄭玄の説を採っている。このことから、何晏は『孔子家語』を見ていなかったと劉汝霖は指摘している⁷⁵⁾。『魏書・何晏伝』によると、何晏は正始十年（249）司馬懿のために誅せられたとある。恐らく、その後に『孔子家語』が世に問われたのであろう。その後、『論語集解』は漢魏以来の十数家の『論語』注釈書を集大成したものとして朝廷に奏上され、官定のテキストとなった。その結果、經学の権威が後世の学者の疑問を塞ぐことになり、何晏が『孔子家語』を見なかったことが「子罕」再検討の機会を永く失わせることになったのである。

お わ り に

以上述べてきた通り、筆者は『論語・子罕』篇の「子罕」は孔子の弟子であると考えているが、『孔子家語』の偽作の問題があるため、ここでは断定を避けた。しかし、『孔子家語』の「子罕」が「孤証」（孤立した証拠）ではないことだけは指摘しておきたい。『論語・子罕』篇の問題は、「子罕」を人名とすべきかどうかにかかっており、どの「子罕」が「利と命と仁」を語ったかはそれほど重要な問題ではない。前述の『論語』の篇名分析による「内証」、春秋時代の命名習慣及び三人の「子罕」の存在による「傍証」は、すでにこの問題の解決に十分な根拠を与えており、「子罕言利與命與人」の「子罕」は人名であると断言して良いと思う。

本稿を終えるに当たって、筆者は二つのことを痛感している。一つは、學術の權威が一旦確立されると、それがいかに研究者の目を塞いでしまうかということである。『論語・子罕』篇の「子罕」が人名であることを感知することはそれほど難しいことではない。筆者は、最初に『論語』を読んだ時、「子罕」を直感的に人名と受け取った。その後、諸大家の解釈に圧倒されて、なるほどと感心したこともあるが、やはり最初の疑いが消えない。それから長い年月を経て、今ようやく、その權威の呪縛から飛び出すことができたと思っている。実に道は遠かったのである。もう一つは、古い伝統が誇るべきであることは認めるが、場合によってはそのマイナス効果も甚だしいということである。最初の一步が間違うと、

学術の伝承の中で次から次へと流れていく破目になる。結局、集団無意識で堆積された幻像が事実の真相を隠してしまい、あたかも真相であるかのように見える。これを原点に戻す作業はかなりのエネルギーを要する。本稿が僅か「子罕言利與命與仁」の八文字のため、ここまで論証しなければならなかった理由もまさにここにあるのである。

付記：本稿の執筆にあたり、広島大学大学院文学研究科の橋本敬司先生から多数のご教示を賜った。記して厚く感謝の意を申し上げる。

注

- 43) 『左伝・襄公二十六年』注。
- 44) 楊希穆前掲書。344－345頁。
- 45) 清の陳厚耀の『春秋世族譜』、邵武徐氏刊刻本。
- 46) 『左伝』哀公十三年。また、『春秋公羊伝』哀公十三年。
- 47) 今本『孔子家語・七十二弟子解』には「宰父黒、字子黒」となっているが、『史記』司馬貞『索引』は「罕父黒、字子索」としている。唐の時代司馬貞が見た『孔子家語』は今本と違っていたと思われる。「宰」と「罕」は形が近いため、伝写を誤ったものだと思う。
- 48) 王引之前掲書。
- 49) 宋の公族は「戴」姓である。
- 50) 陳厚耀の『春秋世族譜』は次のようになっている。
戴公→術(樂父)→澤(碩父)→須(夷父)→呂(字東郷)→樂士曹(字西郷)→樂喜(字子罕)
- 51) 鎌田正著『春秋左氏伝』(明治書院『新釈漢文大系』)による。以下同。
- 52) 竹内照夫著『禮記』(明治書院『新釈漢文大系』)による。以下同。
- 53) 竹内照夫著『韓非子』(明治書院『新釈漢文大系』)による。以下同。
- 54) 『史記』卷八十三・魯仲連鄒陽列傳第二十三『索隱』。案左氏、司城子罕姓樂名喜、乃宋之賢臣也。漢書作「子冉」。不知子冉是何人。文穎曰「子冉、子罕也」。又按。荀卿傳云「墨翟、孔子時人、或云在孔子後」。又襄二十九年左傳「宋饑、子罕請出粟」。按。時孔子適八歳、則墨翟與子罕不得相輩、或以子冉為是也。
- 55) 孫詒讓撰「墨子伝略」と「墨子年譜」(『墨子閑詁』附録『新編諸子集成』世界書局 1978年)を参照。
- 56) 方詩銘、王修齡の『古本竹書紀年輯証』は、『史記・宋世家』の索隱に引用された「宋剔城肝廢其君璧而自立也」という『古本竹書紀年』の記述をもとに、皇喜のことを「剔城肝」だとしている。「剔城」は「司城」と発音が近く、「肝」もまた「罕」と発音が似ていることから、「司城子罕」の「皇喜」は宋の国王となった人物とみることができる、と。その根拠は蘇時學の以下の説による。
蘇時學云。「戴氏篡宋之説、雜見於『韓詩』、『淮南』、『説苑』諸書、而莫始於『韓非子』。『韓非子』曰。『戴氏奪子氏於宋』、又曰。『司城子罕取宋』、又曰。『戴驩為宋太宰、皇喜重於君、二人者爭事而相害也、皇喜遂殺宋君而奪之政。』韓非於此事固屢言之、而必與齊之田氏並言、明田氏與戴氏皆篡之臣也。而『呂氏春秋』於宋偃之亡、亦曰『此戴氏之所以絶也』、不言子氏而獨言戴

氏、則戰國之宋為戴氏之宋、而非前日子氏之宋固甚明。然韓非既言戴氏、又曰皇喜、日子罕者何也。則戴其氏、而喜其名、子罕乃其字也。凡名喜者多字子罕、若鄭之公孫喜字子罕是也。……或曰。戴氏之篡宋固然矣、然則其篡宋當以何時歟。按『紀年』云。『宋易城肝廢其君瑩而自立。』瑩者宋桓侯、而易城肝殆即司城子罕歟。」（見陳奇猷『韓非子集釋』卷二114－115頁）

ただし、蘇時學氏の説には次のような問題点がある。1、皇喜の氏は皇、名は喜、字は子罕である。氏を戴にしたのは間違い。2、鄭の公子喜子罕を「公孫喜」と誤記している。3、『史記』と陳厚耀の『春秋世族譜』によると、宋の国は春秋時代の戴公から伝えてきたのであるが、『呂氏春秋』の「此戴氏之所以絶也」の一文は、戴公から伝来した国がここで絶たれたとも解釈できる。

筆者は皇喜が単なる執政に止まり、宋の君主にはならなかったと考えている。実際、田氏の「篡齊」でさえ、政権が移るまでにはかなり長い期間を要した。田常が前481年に簡公を殺してから、齊の威王が正式に即位する（前356年）まで、125年の歳月を費やしたのである。皇喜がもし宋の君主になったとすれば、事件はもっと大きな騒ぎになり、『史記』等の史籍がこれを記録しないわけがないと思う。以上の理由で筆者は孫詒讓の説に従った。

57) 王肅注『孔子家語』『伝世文献』所載。

58) 孫志祖『家語疏証』巻六では、「子罕」が「子罕」になっている、しかも「罕」の下に「同羔」と注を加えている。即ち、孫志祖は「罕」が「羔」と同音であるため、『家語』の「子罕」を「子羔」のことに認定しているのである。

「子羔」は孔子の弟子の高柴^{あざな}の字である（『史記・仲尼弟子列伝』）。『孔子家語』のこの「子罕」の条の前にも登場している。「子路與子羔仕於衛、衛有蒯聵之難。」類似の資料が『左伝・哀公十五年』にも見られる。ここでは、孫志祖は問題の「子罕」を「子羔」と入れ替えて、『孔子家語』のこの記述の存在を抹消しようとしたと思われる。なぜならば、孫志祖の『家語疏証』は『孔子家語』が王肅の偽作であることを立証する目的で作られたものであり、『孔子家語』と『荀子』『大戴禮記』『説苑』『史記』などの古書と重複が見られる部分はすべて王肅の偽作だという論法がその証偽手法の基本となっている。したがって、他の古書に見当たらない「子罕」の存在を他の文献にしばしば登場する「子羔」に入れ替えることは孫志祖の証偽作業にとって都合である。

しかしながら、孫志祖の説には無理がある。「子罕」の「罕」は、「罕」と書かれることもある。王引之の「春秋名字解詁」には「鄭渾罕字子寛」条に「罕讀為衍、鄭公子喜字子罕、宋樂喜字子罕、皆借罕為衍」と注釈している。「罕」は「罕」の異体字である。孫志祖『家語疏証』巻六の「罕」は、そもそも「罕」と形が近いため、伝写の誤りではないかと筆者は考えている。

59) 『漢書・芸文志』

60) 孔穎達『禮記・樂記』疏の引用による。

61) 朱彝尊『經義考』引王柏『家語考』。

62) 姚際恒『古今偽書考』

63) 範家相『家語証偽』十卷。孫志祖『家語疏証』十卷。隋士珂『孔子家語疏証』十卷。丁晏『尚書余論』、崔述『洙泗考信録』等、皆『孔子家語』は王肅の偽作だと主張している。

64) 『四庫全書総目』中華書局 1995年4月 769頁。

65) 張心澂『偽書通考・総論』を参照。上海古籍出版社1998年7頁。

66) 孫志祖『家語疏証・錢馥跋』。「肅伝是書時、其二十七卷具在也。若判然不同、則肅之書必不能

行。既行矣、二十七卷者必然不至於泯沒也。惟增多十七篇、而二十七卷即在其篇中、故此伝而古本則逸耳。例之古文尚書、當不謬也。況有馬昭之言足擬也。」

67) 『朱子語録』。朱熹曰。「家語只是王肅編古録雜記、其書雖多疵、然非肅所作」又曰。家語雖記得不純、卻是當時書。

68) 『武内義雄全集』第四卷『儒教篇三・読家語雜識』角川書店 1979年8月 343-350頁。

69) 水澤利忠訳『史記八(列伝一)』明治書院1990年 193頁。

70) 「孔氏古文」については、従来二つの解釈がある。1、孔子の旧宅の壁から発見された「壁中書」。2、孔家伝来の古籍。本稿は2の説に従う。

71) 『孔子・仲尼弟子列伝』と今本『孔子家語・七十二弟子解』の異同には主に二つの原因が考えられる。1、司馬遷の「疑者闕焉」による削除と、2、『孔子家語』の流伝過程での脱落である。司馬貞『索引』は両者の異同を次のように指摘している。参考に値するため、下に引用しておく。

『孔子・仲尼弟子列伝』。自子石已右三十五人、顯有年名及受業見于書傳。其四十有二人、無年及不見書傳者紀于左。

索隱按。家語此例唯有三十七人。其公良孺、秦商、顔亥、叔仲會四人、家語有事跡、史記闕。然自公伯遼、秦冉、鄒單三人、家語不載、而別有琴牢、陳亢、縣亶當此三人數、皆互有也。如文翁圖所記、又有林放、蘧伯玉、申枨、申堂、俱是後人所以見增益、於今殆不可考。

72) 武内義雄前掲書。192-195頁。

73) 『晋書・鄭冲伝』、何晏『論語集解・序』を参照。

74) 何晏『論語集解・序』を参照。

75) 劉汝霖『漢晋學術編年』

キーワード 論語 (Lun yu) 子罕 (Zi han) 孔子 (Confucius)

孔子家語 (Kongzi jiayu) 別句説 (Biejushuo)

史繩祖 (Shi Shengzu) 徂徠 (Sorai)

(CHEN Zhongqi)